



対訳で楽しむ 『女の一生』⁵

永田千奈

「女の一生、キャラ図鑑」と称して、主な登場人物にスポットをあてながらストーリーをたどってきたが、今回は、物語の初めと終わりに登場する（つまり、中間部にはまったく出てこない）ロザリをとりあげる。

裕福な家庭に生まれ、何不自由なく育ったジャンヌだが、結婚後は過酷な人生が待っていた。夫を亡くし、両親を亡くし、息子は家出中という孤独なジャンヌ。そのジャンヌを救ったのが、ロザリである。乳姉妹であり、女中であるロザリは、ジャンヌの分身ともいべき存在である。もっとも、お嬢様として幸福そうな少女時代を過ごしたジャンヌに比べ、娘時代のロザリはあまりぱっとしない。男爵夫人やジャンヌのお世話係として働く、「愚鈍な田舎娘」だったのだ。まずは、その頃の姿を見てみよう。修道院から出たジャンヌが家族とともに馬車でレ・ブールの屋敷に向かう場面である。

Jeanne était prête à monter en voiture lorsque la baronne descendit l'escalier, soutenue d'un côté par son mari, et, de l'autre, par une grande fille de chambre forte et bien découplée comme un gars. C'était une Normande du pays de Caux, qui paraissait au moins vingt ans, bien qu'elle en eût au plus dix-huit. On la traitait dans la famille un peu comme une seconde fille¹⁾, car elle avait été la sœur de lait de Jeanne. Elle s'appelait Rosalie.

訳 ジャンヌが馬車に乗り込もうとしていたそのとき、男爵夫人がようやく、夫と女中に両脇を抱えられ、二階から降りてきた。この女中というのが、男と間違われるぐらい大柄で力もち、恰幅がいい。コー出身のノルマンディー女で、18歳になったばかりだということに、どうみても二十歳以上に見える貫禄のもちぬしだ。彼女は、この一家のなかで、娘のような存在になっていた。というのも、この女中、ジャンヌの乳姉妹だったのだ。名前は、ロザリという。

注 1) そのまま次女と訳したいところだが、ロザリのほうが年上。もう一人の娘と訳すとロザリがジャンヌと対等の立場のような印象を与える。ここでの *seconde* は、二義的なもの、副次的存在と捉える。

やがて、ロザリは、不義の子を出産する。ジャンヌの夫、ジュリアンが女中のロザリに手を出し、子供を産ませたのだ。ロザリは、男爵夫妻のはからいで持参金をつけてもらい、村の男のもとに子連れで嫁ぐ。こうして、ロザリはジャンヌの前から姿を消した。

それから24年後、夫も両親も世を去り、息子は音信不通、ジャンヌは途方に暮れていた。最後まで寄り添ってくれたリゾン叔母が亡くなり、その葬儀の最中に、ジャンヌは墓地で倒れてしまう。やがてふと目を覚ますと、ジャンヌは屋敷の寝台にいた。しかも、寝室に見知らぬ農婦がいる。ジャンヌは、墓地で倒れた自分を抱きかかえ、屋敷まで運んでくれた農婦がロザリだとはまだ気づいていない。

Elle s'éveilla vers le milieu de la nuit. Une veilleuse brûlait sur la cheminée. Une femme dormait dans un fauteuil. Qui était cette femme³⁾? Elle ne la reconnaissait pas, et elle cherchait, s'étant penchée au bord de sa couche, pour bien distinguer ses traits sous la lueur tremblotante de la mèche flottant sur l'huile dans un verre de cuisine.

Il lui semblait pourtant qu'elle avait vu cette figure. Mais quand? Mais où⁴⁾? La femme dormait paisiblement, la tête inclinée sur l'épaule, le bonnet tombé par terre. Elle pouvait avoir quarante ou quarante-cinq ans. Elle était forte, colorée, carrée, puissante. Ses larges mains pendaient des deux côtés du siège. Ses cheveux grisonnaient. Jeanne la regardait obstinément dans ce trouble d'esprit du réveil après le sommeil fiévreux qui suit les grands malheurs.

訳 ジャンヌは夜なかにふと目をさました。暖炉の上に小さな灯りが^{とも}点されている。肘掛け椅子で女が眠っている。この女は誰だろう。知らない女だった。コップの油に布切れを浮かべ、そこに火を灯したランプが部屋をぼんやり照らしている。揺れる灯のなか、女の顔をもっとよく見ようと、ジャンヌは寝台の端から身を乗り出した。

その顔にはかすかに見覚えがあった。だが、いつ、どこでとなると思い出せない。女は、片方の肩に顔を預け、床に帽子が落ちたのも気づかず、すやすやと眠っていた。年のころは40代前半にちがいない。頑丈そうで、日に焼けており、がっちりとした体格に力がみなぎっている。椅子の両側に投げ出された大きな手。髪には白髪が混じっている。ジャンヌは大きな不幸のあと、ようやく眠ったものの熱にうかされ、まだ意識がはっきりとしないまま、女の顔をじっと見つめていた。

注 3) 自由間接話法。ジャンヌの心中の声。4) ここも自由間接話法。ジャンヌの心の動きがそのまま言葉になっている。

やがて、目を覚ましたロザリがジャンヌの名を呼ぶ。ようやく、その女がロザリであると気付いたジャンヌ。二人は再会の喜びに思わず抱き合い、涙する。そして、長年の空白を埋めるべく、身の上話を始めるのだった。

Elle finit par demander :

Comment es-tu revenue, ma pauvre fille ?

Rosalie répondit :

— Pardi, est-ce que j'allais vous laisser comme ça, toute seule, maintenant⁵⁾!

Jeanne reprit :

— Allume donc une bougie que je te voie.

Et, quand la lumière fut apportée sur la table de nuit, elles se considérèrent longtemps sans dire un mot. Puis Jeanne, tendant la main à sa vieille bonne, murmura :

— Je ne t'aurais jamais reconnue, ma fille, tu es bien changée, sais-tu, mais pas tant que moi, encore.

Et Rosalie, contemplant cette femme à cheveux blancs, maigre et fanée, qu'elle avait quittée jeune, belle et fraîche, répondit :

— Ça c'est vrai que vous êtes changée, madame Jeanne, et plus que de raison. Mais songez aussi que v'là vingt-quatre ans que nous nous sommes pas vues.

Elles se turent, réfléchissant de nouveau. Jeanne, enfin, balbutia :

— As-tu été heureuse au moins⁶⁾?

訳 ジャンヌはやっとこのことで尋ねた。

「どうして戻ってきてくれたの?」

「ジャンヌ様をひとりで放っておくわけにはいかないじゃないですか!」

「蠟燭を点してちょうだい。あなたの顔が見えるように」

ロザリが枕もとのテーブルに灯りを運ぶと、ふたりは無言のままじっと見つめあった。ジャンヌは、年老いた元女中に手を伸ばし、言った。「わからないはずよね。おまえもすっかり変わってしまったんだもの。でも、私ほどじゃないわね」

ロザリは、目の前に横たわる、やせ衰えた白髪的女性をつくづく見つめた。最後に会ったときはまだ若く美しく、初々しさもあったというのに。「確かに、お変わりになりましたね、ジャンヌ様、ずいぶんお変わりになりました。でも、何せ24年ぶり

すからね」

ふたりは再び物思いに沈み、黙り込んだ。やがて、ジャンヌが思い切って尋ねた。「恨んでいるわけじゃないでしょうね?」

注 5) ジャンヌが tu で問いかけているのに対し、ロザリは vous で答えている。6) 直訳すれば「そこそこ幸福な生活は送れたのね?」だが、問いかけの意図を汲み取り、そのあとの会話につなげるために突っ込んだ訳にした。

再会したロザリは、もうかつての初心で鈍重な田舎娘ではなかった。屋敷を去る時に男爵夫妻が結婚の持参金としてつけてくれた農場を元手に、夫とともに財産を築き、一人息子(ジュリアンとロザリのあいだに生まれた子)も無事に育てあげ、堂々とした農場の女主人になっていたのだ。特に美人でも成績優秀でなく目立たなかった子が、同窓会で数十年ぶりに再会したら、意外や意外、中小企業の女社長になっていた、というシーンでも想像していただきたい。ロザリはその後、がっしりした体格、大きな声、堅実な思考で「田舎のおばちゃんパワー」を発揮、お金のやりくりから、引越し、放蕩息子の後始末まで、ジャンヌ様を助けるために奮闘するのである。

女中部屋

モーパッサンの描写の細密さは、人物だけにとどまらない。ジャンヌの住む屋敷についても細部まで描きこまれている。翻訳中、ためにレ・ブールの屋敷の見取り図を描いてみたところ、ほぼ完全に間取りを再現することができた。地階にサロン、ジャンヌの部屋は二階、ロザリは上階の女中部屋 chambre de bonne で寝起きする。

作中、ロザリとジャンヌの関係はしばしば「姉妹のような」と表現される。ただし、いくら乳姉妹とはいえ、かたやお嬢様、かたや女中なのだ。再会後、ジャンヌはすっかりロザリを頼るようになり、一見、ふたりの立場は逆転したかのように見える。だが、ロザリはジャンヌを« Madame »と呼び続け、話しかけるときは常に vouvoyer である。レ・ブールの屋敷を引き払い、小さな家に引っ越したあとも、ロザリは屋根裏、物置の隣にある「女中部屋」を自室にする。最後まで二人は対等な関係ではないのだ。

ちなみに、作中では、女中を示す言葉として servante と bonne、両方が使われている。いかにも「使用人」という servante に比べ、bonne には形容詞 bon から派生した言葉である。善良なロザリには bonne という言葉がふさわしい。

※ 原文は *Une vie*, Le Livre de Poche 版から引用。

※ 訳文は拙訳『女の一生』(光文社古典新訳文庫)を使用。

(ながた・ちな)